

## 短期集中英語研修の現状と分析

——英語科：米・豪・加 語学研修プログラムの比較検討を中心に——

大森裕実・坂倉真弓

**A Report on Current Overseas English Study Programs to the U. S., Canada and Australia  
by the English Department, Nagoya Women's College**

Yujitsu OHMORI and Mayumi SAKAKURA

The aim of this present paper is to provide a special report on the correlation between Current Overseas Study Programs and the English education in colleges, based on an outline of English Study Programs to the U. S., Canada and Australia conducted by the English Department of Nagoya Women's College. *The Revised Standard of University Establishment* by the Ministry of Education, which has been in force since July 1, 1991, presents the prospects for the reformation of curriculums in four-year & two-year colleges and universities, especially in the field of general education and foreign language education in relation to other fields. Under the influence of the new standard, each college will have a revised program of English teaching and learning, including the expansion of long- & short-term overseas programs for English training. The merit of study abroad lies what the students learn in English-speaking countries, as well as how much they try to improve their English skills. The present writers happily observe that conservative Japanese colleges are moving toward self-improvement as a result of the revised standard.

### 序

最近の目ざましいばかりの情報化社会の発展は、イギリスの生んだ世界的歴史学者アーノルド・トインビー (Arnold J. Toynbee, 1889-1975)<sup>1)</sup> がかつて述べた言葉「距離の破壊」“the destruction of distance”を証明、具現化する方向へ拍車をかけているものと云える。この世界的潮流に日本も例外なくのみ込まれ、巷間「国際化」が声高に叫ばれている<sup>2)</sup>。真の意味での「国際化」が「脱亜入欧」ではないことは言を揆たないが、そうは云っても明治維新以後の日本の歩んだ道と現在置かれた立場を考慮するならば、日本人にとっての国際化の象徴は外国語——とりわけ英語——を縦横無尽に駆使できる言語能力に代表されるとも云えよう。さらに、日本人にとっての英語のもつ役割——英語学習の目的——も時代の推移と共に変化してきていることは明らかで、英米語それ自体を研究・学習対象とする立場とは別に、英米語をコミュニケーションの手段——国際語としての英語——として位置づけ、それを使うことによって世界の様々な人々と多様な分野で情報交換を行なっている言語運用に強調点が附加されている。

海外文化受容のための受信型英語から、他の文化圏の人々と対等に日常会話から専門分野の議論までこなす発信型英語への意識の改革・転換が要求されていると云ってよい。

言語の科学的研究の分野で言語研究の対象を *langue* (ラング) と *parole* (パロール) に区分したのはソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913) であったが、同様の区分がチョムスキー (Noam Chomsky, 1927-) においても *language competence* (言語能力) と *language performance* (言語運用) に対応する形で明示されている。そしてこの二区分の内、*langue or competence* を第一の言語研究対象と定めてきた訳だが、近年の社会言語学 “socio-linguistics” や語用論 “pragmatics” の学問的発展と同調して *parole or performance* といった実際の言語運用と深く関わる分野に焦点があてられる傾向が強い<sup>31)</sup>。

以上のような「国際化」の世論、また同時に言語研究の最近の動向を真摯に受けとめる形で大学における英語教育カリキュラムの大幅見直しが進められ、1991年7月1日に文部省の大学設置基準が改正発表され、実効力をもつに至った。従来非効率的で実績が上がっていないとの批判の強かった外国語教育課程にもメスが入り、今回の改正基準によれば、各大学は他大学・短大において履習した授業科目の修得単位を30単位まで認めることができ、これは外国の大学・短大への留学にも準用されると考えてよい<sup>32)</sup>。各大学が教育上有益と認める時は、短大または高等専門学校専攻科における学修、その他文部大臣が別に定める学修を、当該大学における授業科目の履習とみなし単位を与えることができる(第29条第1項)とすれば、日本英語検定協会技能試験(英検)合格者に何単位かを認定することも可能である<sup>33)</sup>。いずれにしても合計30単位を超えない範囲で多様性が示されているところが今回の設置基準の改正で人目を引く点のひとつであり、確かに文部省主導で敢行された観は否めないものの、大学側の自助作用にかなり期待してよいのではないかと思われる。

名古屋女子大学短期大学部英語科が開設されたのは1982年(昭和57年)4月のことであるが、学科開設当初から国際社会・情報社会に即応できる実戦力を身につけた人材育成に力点を置き、学科開設から僅か2年目の1984年2月20日-3月11日の3週間、アメリカ合衆国カリフォルニア州のミルズ(女子)大学 *Mills College* に於て集中英語研修を実施した。このミルズ大学での春の海外語学研修はその後の英語科の語学教育の基軸的価値をもつようになったと云ってよい。

— An Outline of the English Study Program at Mills College —

	(students)	(students)	
1 st program: Feb. 20-Mar. 11, 1984.	34	5 th program: Feb. 19-Mar. 9, 1988.	61
2 nd program: Feb. 19-Mar. 10, 1985.	31	6 th program: Feb. 19-Mar. 10, 1989.	74
3 rd program: Feb. 19-Mar. 10, 1986.	22	7 th program: Feb. 21-Mar. 12, 1990.	56
4 th program: Feb. 20-Mar. 11, 1987.	56	8 th program: Feb. 19-Mar. 11, 1991.	

(cancelled, because of the Gulf War)

このようにしてアメリカ語学研修は確実に根をおろしていったが、その一方で語学研修地域の拡張を望む声も次第に大きくなっていく。その事情をうけて、1988年2月、ニュージーランドでのホームステイ・プログラムを展開し、1990年2月22日-3月12日にはオーストラリア・ニューサウスウェールズ州のウォロンゴン大学 *University of Wollongong* に26名が参加する語学研修を実施し、学生の選択の幅を広げている。さて、上記の表で示されるように順調に歩を進めていたアメリカ研修ではあったが、第8回(1991年春)は中東湾岸戦争の影響を受け中止となる。しかし、学内外諸方面からのバックアップを得て、1991年6月30日-7月23日、カナダ/ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバーにある *Vancouver Community College* に

30名が参加して語学研修が実施されるという次第となった。天の配剤と云うべきか、この段階に至って、英語科は北米に2地域、オセアニアに2地域の海外語学研修機関をもつことになった訳であり、このような短期集中語学研修地域の拡張と発展が今後の英語科の外国語教育に与える影響も少なくないと考えられる。そこで今回の第8回海外語学研修（カナダ）に引率・同行した2名の著者はミルズ（米）、バンクーバー（加）、ウォロンゴン（豪）の研修プログラムを比較・検討し、何らかの形で中間報告をまとめた方がよいと考え、敢えて稚拙な報告書を活字にすることを決意した。共著者の坂倉助手には大学3年の時に出身大学で同種の短期集中プログラムの体験があり、そのことがこの報告書をまとめるのにどれ程役に立ったか測りしれない。また、大森には *A Practical Report on Study Abroad in the U. S.: in the Case of State University of New York, College at Buffalo* (1991)<sup>6)</sup> があり、その中で述べた合衆国と日本の大学授業システムの違いとその長短、日本の大学の授業システム改善へ向けての提言が今回の論文の基調をなしていると言ってもよい。そこで次章では、大森（1991）の要点を簡略に記しておくことにする。

### 日米の大学授業の長短：大森（1991）に基づいて

ここでは、寺本助手のニューヨーク州立大バッファロー校での原体験をふまえて、日米比較の観点から、合衆国の大学の授業システムの長短を指摘することを試る。

#### (1) アメリカの大学の優位点

A. 授業（コース）のシラバスが明確に述べられていること。

- i. シラバスが明示されることによって学生は選択する授業の目的と輪郭を把握することができ便利である。特に留学生にとっては有難い。
- ii. シラバスに授業担当教員がどのような評価基準（例えば、中間試験の成績30%、期末試験の成績30%、授業への出席と積極的参加10%、ボランティア（課外）活動20%、課外活動報告書10%⇒合計100%で評価）で単位を認定するかの方針が具体的かつ明確に示されている。このことにより学生はどのような態度で授業に臨めばよいか序めから予測することができ、同時に与えられる評価についても納得がいく。

B. 授業での自由闊達な意見の交換が是認されること——授業担当教員はたとえ学生の意見が自分の見解と異なっている場合であっても、学生が自らの考えをできるだけ多く述べるように学生を鼓舞する雰囲気がある。

C. 授業（コース）によっては形而上的学問研究にとどまらず、具体的・実践的理念に基づいて展開されるものがあり、地域共同体にとけ込んでの課外活動を授業の一貫と位置づけ、それが卒業後の学生の進路、実社会での活動に直接的に結びつく方針をとる。

D. 学生が自分の受けた授業とその担当教員に関して様々な点から評価するシステムを採用していること——この制度は残念ながら日本の大学にはまだ導入されていないが、自己評価の必要性和共に導入される可能性が高い。

E. 授業に関連する参考図書が複本で十分に図書館に備えられていること——図書館の文献検索のコンピューター化も進んでいる。

#### (2) アメリカの大学の劣位点

A. 授業での自由な意見の交換を求めるあまりに、緻密な準備や熟考もせずに発言する学生も少なくなく、そういった場合の教室での議論は非効率的で実りが期待できない。

B. それぞれの授業を選択している学生は当然その分野で要求される基本的知識は身につ

けているものと見なされるので、もし学力が不足している場合には自分自身で補わないと授業に全くついていけない(これは留学生にとってはかなりのハンディとなる)。

C. 授業担当教員は授業時間に大変厳格で、場合によっては議論の途中であっても打ち切ることがあり、その際の議論は何ら建設的とは云えない。

アメリカの大学で展開されるカリキュラムの利点を日本の大学の授業システムに導入しようと思えば、次の3点を重要課題として指摘しておきたい。

〈I〉日本の大学で現在行なわれている1コマ90-100分/週の授業形態を改め、1年を2-3学期に区分して、50-60分の単位で2コマ/週の授業形態を採る。外国語教育にとって週1回の長時間授業が非効率であることは自明のことであり、この改革は急務である(7月1日からの大学設置基準の改正で、授業数と授業時間についても柔軟性が認められ、各大学の前向きの姿勢が期待される)。

〈II〉すべての授業の内容と担当者が、当該授業選択の学生から細部にわたって評価される制度を導入すれば、日本の大学の授業も従来行なわれてきた紋切型で学生の興味を減退させるものから脱却して、充実度の高いもの、即ち教授者側と受講者側のコミュニケーションの密度の濃い授業となるであろう(これも今回の大学設置基準の改正で、大学の自己評価という点にもり込まれているが、日本の風土から推し測って、その実現の見通しはかなり厳しい)。

〈III〉国の内外の他大学との単位互換の幅を広げること。海外の大学・短期大学での長期・短期の留学で修得した単位をできる限り認定することにより、従来にも増して生きた言語をそれに附随する背景的文化と併せて享受する機会を多く提供することができる(これについても大学設置基準の改正で、各大学の判断により30単位を超えない程度において柔軟に認められる傾向にある)。

この第3点に関連して英語科の海外語学研修も位置づけていくことが必要だと思われる訳だが、以下に今夏実施されたカナダでの語学研修と共著者坂倉助手の体験したカリフォルニア州立大デーヴィス校 *University of California, Davis* での語学研修を比較・対照して、その特色と意義を明らかにしたいと思う。

#### 語学研修プログラムの比較(1): 夏期研修——V. C. C. vs. U. C. Davis——

各大学の実施する短期の語学研修プログラムというものは、大学の教育施設(教室、図書館、情報処理室, L. L., etc.)での授業, キャンパスを離れての学外授業, 授業内容と関連性のある課外活動(Field Trip, Outdoor Activities, etc.), ホームステイ, 見聞を広めるための観光が1セットになった総合的な実体として認識するべきもので、また実施期間にも差があることを考慮に入れると、安易に比較対照するのは考えものではあるが、一方において、授業内容や課外活動の状況を相対的に評価しておくことも意味のあることと思われる。

	〈V.C.C.〉	〈U.C.Davis〉
教室授業時間数 <sup>7)</sup>	180 mins./day × 14 = 42 hrs.	200 mins./day × 17 = 56 hrs. 40mins
課外活動時間数	26 hrs.	26 hrs.
〈Contact Assignment〉	2 hrs.	0 hrs.
〈Workshop〉	4 hrs.	4 hrs.
〈Outdoor Activities〉 & 〈Field Trip〉	20 hrs.	22 hrs.

V. C. C. も U. C. Davis もどちらも午前中のみが教室での授業ではあるが、V. C. C. の方が 9:00→12:00, 90分授業 2 コマという日本の大学と同じ形態の時間配分であるのに対して、Davis の方は 8:30-12:20, 50分授業 4 コマという語学学習に最適の形態を採る。筆者の経験からも判断して、教授者サイド、受講者サイドのどちらの立場から云っても、外国語の技能養成にあたっては 50-60分授業の方が理想的である。もっとも、これが lecture となると必ずしも適当だとは云えないが、外国語（英語）で何かのテーマについて講義を聴くという状況を考え、精神の集中可能な点を考慮に入れると、50分という長さは決して短いとは云い難いし、90分は明らかに長いと云える。

授業形態についても、V. C. C. の場合、オーラル・コミュニケーションを基軸に、その中でカナダの culture, life-style, communication problems, 先住民族の歴史と文化、等々の知識を半講義形式で得て、それについての研究レポートをまとめて口頭発表し、ディスカッションする方法が採られた。研修参加学生がいずれも短期大学の 2 年生であるということとを考慮すると、全くの講義形式のものを単独で組み込むよりも、オーラル・コミュニケーションに収斂する方法は EFL の授業としては評価してよいと思うが、すべての授業を同一の instructor が担当するのは率直に云って如何なものかと思う。確かに学習者の個々のレベルを十分に把握しているという点から見れば一概に批判はできないが、教授者サイドに密接な連携さえ保つことができれば、学習者の心的態度に一種のアクセントをつけるという意味からも、複数の instructors で 1 つのクラスを担当していくという方法も悪くないのではないかと思う。もっとも、短期の語学研修の場合、instructor と学生との人間関係の良し悪しが、教科目の内容を超えて、研修全体に与える影響がかなり大きいと考えられるので、授業内容の充実度向上という一面からのみ論ずることはできないことを記憶にとどめておかねばならない。事実、V. C. C. の場合でも、課外活動の一形態として、クラスの学生が instructor の自宅に招かれてガーデンパーティを開き、午後のひと時を楽しく過ごしたり、スタンレー・パークへ contact assignment を兼ねて一緒に出かけるといったことなど、教授者サイドの one-way communication に陥らないような工夫が見受けられる。

さてここで、坂倉助手のまとめた報告書を基に Davis の授業科目とその長短を略述しておこう。

まず、1 日（午前中）に展開される 4 つの授業は次のようなものである。

- I. Intercultural Research: 語学研修の最後にアメリカと日本の文化・習慣の違いを比較したレポートを発表するので、作文の書き方、発表の効果的やり方を学習する。
- II. Listening & Speaking: [l] と [r] の違いといった日本人学習者の陥り易い発音ミスに注意してのオーラル訓練を行なう（音声学に基づく配慮が随所に組み込まれている）。
- III. Vocabulary & Idioms: 日常生活に使われる身近な単語や言いまわしを学習する（ホームステイでのホストファミリーとの会話と関連性をもつ）。
- IV. Culture: アメリカ人の考え方や生活様式を学習し、それに関して各人の意見を述べ、それを中心にディスカッションする。

〈長所〉

1. 授業の特徴（技能的側面と教養的側面）が対比してよく表われるように構成されている。
2. 各授業にそれぞれ別の instructor がつくので、学生の方も心理的切り換えがスムーズに行なえるし、先生の個性も発揮できる。
3. クラスが placement test の成績で分かれているため、知らない学生と一緒に勉強する

ことになるので、馴れ合いの感じが少なく、適度な緊張を維持しながら学習できる。

〈短所〉

1. 個々の instructor の持ち時間が少なくなるので、学生の学力を把握するのに時間がかかり、自ずとキメの細かさに欠ける。
2. それぞれ4つの授業を有機的に統合しようと思うと、教授者サイドに綿密な打ち合わせが必要とされる (短期集中の EFL では実際のところ多くの場合、時間的余裕がないのではないか)。

この Davis の語学研修では最後に日米比較のレポートが課せられているが、このような課題は V. C. C. や Mills での研修に取り入れられてもよいと思われるので、参考のため具体的資料を転記し、内容の是非についての判断は読者諸氏に委ねる。

### ORAL RESEARCH TOPIC SUGGESTIONS\*

#### I. FAMILY LIFE

- The American Family in Transition · Resulting Structures
- The Single Parent's Life
- The Daily Life of a Two-Income Family
- The Traditional Nuclear Family in Davis
- Financial Responsibilities in the American Household
- Division of Household Labor
- American Housekeeping Styles
- Family Entertainment
- Children's Play Activities
- Child's Role in the Family
- Discipline : Rewards and Punishments for Children 0-2 *or* 2-5 *or* 5-10 *or* 10-15 *or* 15-18
- Personal Independence at 18 : What Does It Mean?
- Personal Hygiene and Health Care
- Relationships Between Mother/Daughter *or* Mother/Son *or* Father/Daughter *or* Father/Son *or* Husband/Wife

#### II. DAY CARE

- Varieties of Day Care Available in Davis
- Davis Pre-Schools : Philosophies and Methods
- Working Mothers : A Balance Between Career and Family

#### III. SENIOR CITIZENS

- Nursing Homes in Davis : Are They Representative of the U S. in General?
- "Entertaining" Senior Citizens
- The Senior's Role in the Davis Community
- Grandparents and Children : What Do They Do Together?

#### IV. STUDENTS' LIVES

- The Lifestyle of a UCD Student
- Leisure and the UCD Student
- The Relationship Between High School and the University

- The Relationship Between the University and a Professional Career
- What is a “Good Student” ?
- The American Education System
- Bilingual Education: The Davis Spanish Immersion Program
- Relationships Between Teachers and Students in the U. S. : Studied Casualness
- V. *DAVIS COMMUNITY*
  - Solar Housing : The Village Homes Model Community
  - Parks in Davis : Philosophy and Use
  - City Government : How Does a Small City Govern Itself?
- VI. *TRANSPORTATION*
  - The Bicycle in Davis
  - Davis : Innovative Traffic Designs
  - Public Transportation : Where Is It and Why?
  - Transportation : Personal Independence and Space
- VII. *ETHNICITY*
  - Minority Groups in Davis
  - Black American Students at UCD
  - Japanese Americans : How Do They Preserve Japanese Traditions?
  - Japanese Contributions to California History and Development
- VIII. *RELIGION*
  - Religious Diversity in Davis : Churches, Synagogues, Mosques and Temples in a City of 40,000
  - Religion and Its Influence on Marriage Customs
- IX. *BEHAVIOR PATTERNS*
  - American Ideas of Friendship
  - Dating and Courtship Customs of Young Americans 18-25 *or* 25-40
  - Nonverbal Communication : How to “Read Between the Lines”
  - American Public and Private Self Concepts
  - Individual vs. Group Activities : A Preference for Individualism/Independence
  - The TV : A Powerful Tool in American Life
  - Diet and Eating Habits of Americans
- X. *IDEOLOGY*
  - The American Dream : What Is It and How Do Davisites Live It?
  - Is Equal Opportunity A Reality?
  - Equal Opportunity in Education: Examples from UCD
  - Change *Means* Progress and Progress is GOOD : Examples of American Lives

\*ALL topics should be considered comparatively with Japanese culture.

一方、午後からの Outdoor Activity に関しては V. C. C. と Davis とに大きな違いが認められる。Davis の方が人口3万の内半数が学生という郊外の小さな大学街に在るという立地条件を活かして、学生を拘束せずに自由に行動させ、同世代のアメリカ人の学生と話す機会を多く提供する方法を採るのに対し、V. C. C. の方は午前の授業より比重が高いくらいに Outdoor Activity を研修プログラムにきっちりと組み込み、それぞれのイベントに monitors と呼ばれる専属の学生スタッフが4～5名同行し、日本人学生とコミュニケーションをはかりながら、彼らがリードする形で企画を進めるといった方式を採る。バンクーバーという自然に恵まれた環境を最大限に利用して、Grouse Mountain への Hiking (これには contact assignment も含まれる)、Stanley Park での Cycling・Aquarium 見学 (これにも contact assignment が含まれる)、Buntzen Lake での Horseback Riding, Queen Elizabeth Park での Pitch & Putt Golf, Vancouver 最大の大学 University of British Columbia を見学 (ここには新渡戸稲造博士を記念した the Nitobe Garden やコレクションの豊富さと規模で群を抜く人類学博物館が在る)、さらにホストファミリーと V. C. C. の研修スタッフ全員が参加する Homestay Picnic が Kitsilano Beach で実施された。これに加えて instructor と一緒に、Gastown, Granville Island に出かけるという企画も午後の課外活動の中に序めから組まれていた。こういった outing に関してのスタッフ一丸となつての企画力と実行力は筆者の参加した語学研修の中では群を抜いて良質のものであり、高く評価してよいのではないかと思う。

#### 語学研修プログラムの比較(2)：春期研修——Mills vs. Wollongong——

この2つの大学の教育機関への短期語学研修は同時期に同期間で行なわれているので、北米とオセアニアという地域差の問題もあるが、それもひとつの特徴と考えて比較してみることにする。

Mills の場合、実際の短期語学研修を担当するのは附属機関の the English Center for International Women であり、その専属スタッフが授業を受け持つ。スタッフの多くは TESL といった専攻で MA. を取得した女性講師陣である。この ECIW での授業形式については興津 (1986)<sup>81</sup> に詳しいが、やはりスピーチ・コミュニケーションを基調とする午前中2コマ (90分×2) の授業に午後からの field trip を加えて、ひとつの統合性をもたせようとするものである。換言すれば、教室内での純粋な言語形式の習得から、実生活での社会的・文化的コンテクストの中での言語運用への橋渡しを目的とするものと推察される。興津 (1986) も次のようにその点を指摘する<sup>81</sup>。

ECIW seems to emphasize what this paper has called social patterns and culultural patterns as well as (or more than) linguistic patterns. It divides the course into two parts : a morning session in the classroom and an afternoon field trip outside the classroom. In the afternoon the students can relearn in close contact with the real, complicated situation what they learned through verbal practice in the morning. Sometimes field trips give a chance not only to review the morning lesson, but also to learn or acquire personally or heuristically the very way English as a living language is actually being used in a speech community. This inherent advantage cannot be enjoyed by any other successful teaching method invented and practiced in a foreign country where English is not spoken as the mother tongue (p 281)



As an example of acquiring an English expression quite new to a foreigner, I can cite the following event. At a bus stop I said to the driver, "Does *this bus* go to Solano?" He answered "Yes." After a while, an American came and asked the same question but in a different way of expression. He said, "Do *you* go to Solano?" The expression was too natural and too simple for a foreigner to dream of. (p. 283, Note : 5)

このように、午前のオーラルの内容を午後の課外活動と直結させるという点では、V. C. C. の場合と似ていると思われるが、どちらの場合にも、その関連性の密度を高めようと思うとかなり周到な準備が教授者サイドに要求されることは明らかである。不幸にして、その関連性をうまく処理しきれない場合には、目的意識が明瞭でない冗漫なものになることも事実である。

もっともこの授業形態も、第7回目からは姿を変えざるを得なくなった。海外語学研修の単位認定に伴う授業時間数の確保が必要になったからで、午前には2コマ(90分×2): Structure, Fluency, 午後に2コマ(60分×2): Idioms & Pronunciation, California Historical Landmarks という時間配分となった。この形式だと前節で紹介した U. C. Davis と近いものになっているが、Mills の場合、研修期間が短いため1日中教室で授業を受けることになり、午後の課外活動が大幅に割愛されてしまう。これではせっかくのアメリカ合衆国での語学研修も "living language" としての英語を学習するのはホームステイをしているホストファミリーとだけというようなことになりかねない。教室内外での言語活動のバランスの難しい点である。

オーストラリアの Wollongong の場合も、Mills の場合と同様の形式の語学研修ではあるが、教育機関の立場が U. of Wollongong の副学長配下の ELICOS が授業を担当するという点からみて、大学本部に近いと云うことはできる(もっとも EFL コースの場合、その教育機関がどこの所属であるかということは、学習者の語学力向上と何の相関関係もないと思われる)。オーストラリアの研修も単位認定の関係から短期間に45時間という授業数をこなすという点から、9:00 am. - 3:00 pm. のスピーチ・コミュニケーション中心の授業が組まれていて、こちらも午後の課外活動の時間は少なくなっている。内容は Functional English, Conversational Strategies, Cross-cultural Discussion, Listening Practice, etc. となっており、Mills の研修と大きな差は見受けられない。Mills との大きな違いと云えば、V. C. C. と同様 Wollongong の場合も学生が各自ホームステイ先から大学まで公共交通機関を利用して通学する点である。前節の興津(1986)の引用例からも明らかなように、公共交通機関等で多くの English-speaking people と接することにより、課外活動と同様の言語運用の訓練が自然と可能になると考えられるからである(Mills の場合もホームステイ・プログラムではあるが、ステイ地域のパークレーから大学の在るオークランドまで、治安上の問題から、チャーター・バスで送迎しており、Davis の場合は大学町なので自転車通学が多い)。

### 結語：短期集中英語研修の発展的将来像

たかが3週間そこの海外研修で英語を流暢に話せるようになる訳はないであろうという声をしばしば耳にする。事実、そのことは私達の共通認識でもある。ひとつの外国語を習得しようと思えば随分と長い時間がかかる。しかし、そうは云っても、短期間のアメリカ、カナダ、オーストラリア滞在であっても、日本の教室で長期に渡って英語を学習するよりも効果的である点が少ない。参加学生は、英語という言葉はその背景となる文化と切り離しては存在し得ないことを自らの肉眼を通して認識する。言語が生きものであることを体得するのである。

この点において、英語科の実施してきた短期集中英語研修は意義深いと云ってよい。帰国後、参加学生は、必ずと云ってよいくらい、自分自身の listening や speaking の上達に自信を示すし、そのことが彼らにますますの英語学習に向けての動機づけを与えることになるからである。英語習得への自助作用が働くのである。個々の意識と語学力に差があるにしても、一様にコミュニケーションの手段としての英語の真価を認識して、ひいては外国語の習得に対してのみならず、学問全般に対しての向上心をも喚起するのである。英語教育が教育上哲学的価値をもつ所以でもある。筆者の敬愛してやまない師、故・鳥居次好先生（静岡大学名誉教授で東京高師の御出身）は日本の英語教育学会に偉大な足跡を残されたが、鳥居先生の教育理念の中心は「英語教育が何らかの形で学習者の人格形成に影響を与えること」であった。先生の歌に、『無限なる可能を信じつてなどか教育を語らひ得べき』という一首があって忘れ難い。

D Crystal, *The English Language* (1988) の第1章は今日の世界における英語習得の現状についての記述に充てられていて興味深い<sup>10)</sup>。エリザベス I 世の時代に500-700万人しかいなかった英語人口が、エリザベス II 世の初期には25億人に膨れあがり、1987年現在では3億人を上回る母国語としての英語話者の数に外国語としての英語話者の数を加えると、4-10億人という膨大な数字となる。3億という数字は、アメリカ合衆国の英語人口（2.15億）にイギリス、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、南アフリカの英語人口を加えた数値のように思われるが、4-10億という大きな数値のぶれは英語を second language として習得している人口と foreign language として習得している人口の総和をわり出すのが容易でないことを物語っている<sup>11)</sup>。納得のいく流暢さのレベルを設定して、その習得人口を算出することが困難であるからで、また、いかなるレベルであっても、その人数を確定することは難しいと云わざるを得ない（自由主義社会で英語能力の統一試験を全員に受けさせることなど無理であろうから）。いずれにしても、最少で4億、最多で10億という数値は、英語というものがもはや native English speaker だけの所有物ではないことを示していると云えよう。インドの総人口は1985年現在で7.68億人だが、そこでの英語人口についての Crystal の記述は、現在「英語」の置かれた立場を如実に示す好例であろう<sup>12)</sup>。

... But it is thought that those with an educated awareness of English may be as little as 3 per cent of the population. Perhaps 10 per cent or more, if we recognize lower levels of achievement, and include several varieties of pidgin English. In real terms, the English speakers of India may only number 70 millions - a small amount compared with the total population. On the other hand, this figure is well in excess of the population of Britain.

このように英語が国際語 (international language) となる傾向が強くなればなる程、その色調も脱英米化し neuter なものとなることは否めない事実ではあるが、反面、言語というものがその背景となる社会・文化と不分離であることも無視することのできない事実である。日本における英語学習の目的も英米の文化吸収型から、欧米・アジア諸国に向けての発信型に変化しつつあるように見受けられ、世界的視点からみた英語教育の潮流に合致していると云える。しかし残念ながら、日本の置かれた地理的条件はシンガポールなどとは異なって自然に多国籍の人々と接しインプットが可能という好条件にはなく、インプットが無いのにアウトプットなど不可能ということは明らかであるから、何らかの形で English-speaking country に出かけて行く必要は高まりこそすれ、鎮静化するはずもない。その意味において、今回の大学設置基準改正の第28条・29条に明記された内容は、その基準を各大学が前向きの姿勢で適用し、独自

性で肉付けしていくならば、長短期の留学のかなりの部分が正規の単位として認められ、全体として外国語学習発展へのひとつの driving force となる可能性が高い。加えて、改正設置基準の第21条第2項による「講義及び演習については、15時間から30時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とすること」「実験・実習及び実技については、30時間から45時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とすること」を適用すれば、短期語学研修での単位認定も従来に比べて飛躍的に容易になる。名古屋女子大学短期大学部英語科の海外語学研修も単位認定のための授業時間数確保の点からここ1、2年かなり制約を受けたものになっているが、これにもかなりの柔軟性をもって対処していくことが可能であろう。前節で興津(1986)の指摘にもあったように、短期集中英語研修の最大の魅力と目的が living language として英語を再認識することにあり、研修後に学習者が英語習得に向けての強い motivation をもつようになるとすれば、短期語学研修の効用は実証されたと考えてよい。その意味から、Mills(米国)、Wollongong(豪州)での語学研修プログラムが、午前中の教室での授業と午後の課外活動の tie up を強固なものとして発展していくことが望まれる。

最後に、名古屋女子大学全体の国際交流の動きについて言及しておきたい。従来から家政学部系は廣正義教授(教学理事、前短期大学部学長)の尽力もあって、フィリピン、タイ、マレーシアといった東南アジア諸国や中国に強い関係を保持しており、さらに文学部系では日本文学科を中心に中国、韓国との交流があり、英語英文学科では William Woods College(米国)での第1回目の語学研修を実施することになっている。これに短期大学部英語科実施の米国西海岸、豪州、カナダ西海岸での研修を加えると「環太平洋型国際交流」の輪郭が明らかになってくるように思われる。

いずれにしても、文部省の大学設置基準の改正をうけて、大学が現行カリキュラムの大幅見直しを実行して、長短期の留学経験者が4年乃至2年で大学乃至短期大学を卒業できるシステムの導入が急務であろう。その際、「留学」内容の質的劣悪化を防ぐ何らかのチェック機構も当然必要であることは云うまでもない。そのバランス感覚を涵養することが私達大学教員側に最も必要とされている要件であることは疑う余地もない事実である。

この稚拙なレポートが語学研修の現実の姿の幾分かでも読者諸氏に伝えることができ、この種の問題に広く関心を示して頂ける起爆剤となれば、望外の喜びである。

#### 註

- 1) Arnold Joseph Toynbee (April 14, 1889 - Oct. 22, 1975). English historian whose 12-volume *A Study of History* (1934-61) put forward a philosophy of history, based on an analysis of the cyclical development and decline of civilizations, that provoked much discussion. (fr *The New Encyclopaedia Britannica*, 15th ed. 1989)
- 2) 筆者の英語学の師、神津東雄先生(神戸大学名誉教授、前関西外国語大学国際文化研究所所長)は早くから「国際化」「国際人」という言葉の意味が日本人には「喜ばしいこと」のように受けとられているが、欧米人の意識と差のあることを identity という問題から説いておられる。また、鈴木孝夫『ことばの社会学』(新潮社、1987)も「国際化と日本人のアイデンティティ」や「国際化時代における日本語と英語の役割」を論じた示唆に富む好著である。
- 3) 応用言語学分野における中心課題が、従来の文構造(sentence structure)の理解といった competence 型の言語習得から、コミュニケーション成立のための談話(discourse)を単位とする performance 型の言語習得へとその関心領域を拡大しつつあることが認められる。G. Leech, *Principles of Pragmatics* (Longman, 1983); S. Levinson, *Pragmatics* (Cambridge,

1983): G Brown & G Yule, *Discourse Analysis* (Cambridge, 1983) の上梓が相継ぎ, また, 実際の日常言語のコーパスを基に, usage note を充実させた学習英英辞典も矢継早に出版され注目を集めている. *Longman Dictionary of Contemporary English* (1987<sup>2</sup>), *Collins COBUILD English Language Dictionary* (1987), *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (1989<sup>4</sup>) はその代表的辞書.

- 4) 1991年7月1日付, 大学設置基準改正による改正基準第28条がこれに充当する. 小池生夫「英語と社会: 大学設置基準の改正と大学外国語教育(1)」『現代英語教育』(1991年11月号) に詳しい解説がある.
- 5) 小池生夫 (1991) 参照のこと.
- 6) Yujitsu OHMORI & Minoru TERAMOTO, "A Practical Report on Study Abroad in the U. S. in the Case of *State University of New York, College at Buffalo*," *The Journal of Nagoya Women's University* (Humanities・Social Science), No. 37, 1991
- 7) V C C と U C Davis とでは全体の研修期間の異なっていることに留意しておく必要がある. opening ceremony, graduation ceremony, その他の研修上必要な行事を除いた実際の大学での授業日は V C C が14日, Davis が17日ということになる. 研修全体としては, V C C が24日間, Davis が34日間の日程で組まれている.
- 8) Professor Tatsuro OKITSU, the former Dean of the English Department, reported on the Study Program at Mills College, with detailed descriptions and discussions of teaching at the English Center for International Women in Mills, in "Some Observations on the Intensive English Program Conducted by the English Center for International Women, at Mills College, Oakland, California." *The Journal of Nagoya Women's University*, No. 32, 1986.
- 9) T OKITSU (1986), p. 281, p. 283
- 10) David Crystal, *The English Language* (Penguin, 1988), Chap. I, "The English Language Today," pp. 1-16
- 11) 所謂 Standard English に加えて Pidgin や Creole をどのように扱うべきか立場 (conservative vs radical) の違いによって統計上の数値も異なる.
- 12) D. Crystal (1988), p. 4

## 資料

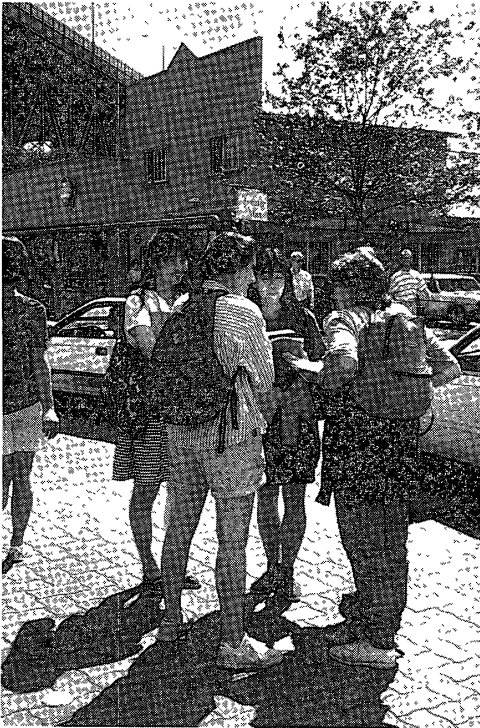


(カナダ・グラスマウンテンで: 左から  
2人目が坂倉)



(塔乗前の空港ゲートで: 中央が大森)

短期集中英語研修の現状と分析



(バンクーバー・グランヴィルアイランドで：  
課外活動の一環として街頭インタビューする  
学生達)

(附記)

本稿は名古屋女子大学教育研究所1991年度一般研究助成対象研究「英語科：米・豪・加 語学研修プログラムの比較検討と短期集中教授法」の成果の一部をまとめたものである。